

エコノミスト

11月11日 **ECONOMIST**
日号 [週刊]—1986年
[定価]—430円

【特集】**激化する産業構造の転換**

小久保勝右 千葉利雄ほか

シルバー人材センター
「**第三の就業**」をどう**拡充**するか 小林謙一



動き出した

ウルグアイ・ラウンド

登誠一郎

ハンガリー改革と

市場社会主義

コルナイ・ヤーノシュ

【連載】

女性社会の現在(第一部アメリカ編)

シリーズ結婚が変わる

家族の機能

ホーシ・川嶋瑤子

ハンガリー改革と市場社会主義

経済改革の理念を問う

コルナイ・ヤーノシュ

盛田 常夫 編訳



ブダペストの自動車ディーラー 新車を手にいれるのは極めてむずかしい 駐車しているのはソ連製

ここに紹介するコルナイの見解は、近く発表される論文(*Journal of Economic Literature*, Dec., 1986)の草稿の後半の抄訳である。ハンガリー経済改革の総括的評価と社会主義理念の検討をおこなっている。

ハンガリー経済はここ三〇年のあいだ、非常に大きな体制改革を進めている。この改革過程の影響は、ハンガリー一国だけにとどまるものではなく、他の社会主義国にもインパクトを与えているようにみえる。

ハンガリー経済は「市場社会主義」になった、あるいは近づいたという見解が流布しているようであるが、こうした理解は誤りである。本稿の目的も、こうした誤った見解を

Kornai János 一九二八年ブダペスト(ハンガリー)生まれ。五五年から経済研究所、コンピュータ・センター研究員、科学アカデミー付属経済研究所、八二年科学アカデミー正会員。ハーバード大学教授。主著に『反均衡と不足の経済学』『「不足」の政治経済学』など。もりた つねお 一九四七年富山県生まれ。一橋大学大学院経済学研究所科博士課程修了。現在、法政大学社会学部教授。

批判することにより、そのためにハンガリー改革の現実を、「市場社会

主義」のビジョンと対照してみよう。

そして、もしハンガリーが市場社会主義でないとしたら、ハンガリーの経済システムをどのように特徴づ

ハンガリー改革の成果

古典的不足経済

六八年改革以前のハンガリー経済は慢性的な不足に悩んでいたし、不足はまた他の社会主義国の特徴でもあった。これについての包括的な分析は、『不足の経済学』（一九八〇年）と題する著書で、詳しくおこなっている。そこでも明らかにしたように、慢性的不足はいくつかの因子の結合結果なのである。

マクロの抑制政策にもかかわらず、超過需要に陥る制度的な傾向が存在する。その最たるものが「投資飢餓」であり、投資資源にたいする飽くなき需要である。政府の経済政策が野心的な突撃型の加速成長を目指している時期には、投資ラッシュがより激しくなる。こうした政府の

けることができるだろうか。この問題にも答えてみようと思う。

まず初めにハンガリー経済の現実を総括し、その後に社会主義ビジョンとの対照をおこなおう。

政策が、加速と減速の循環的変動をひき起こすのである。

生産資材にたいする需要は「ため込み」によって増幅されるし、また輸入資材にたいする需要もきわめて強い。これを埋め合わせるために、ダンピング輸出が促進されるが、この国内的な損失は幾重もの「ソフトな予算制約」措置によってカバーされるようになっていく。ソフトな予算制約のもとで活動している企業と異なり、家計の予算制約はハードであり、とくに古典的システムにおける家計の所得は強い中央管理のもとにおかれている。それゆえ、賃金・価格政策によるマクロ需要管理に伴って、家計の超過需要は明示的に現象することもあれば、しないこともある。

相対価格体系は歪曲されている。

多くの財・サービスは馬鹿げたような低い価格に抑えられているか、ほとんど無料で提供されている。そしてこのこともまた、飽くなき需要を惹起しているのである。

多くの理由により、このシステムの適応能力はきわめて低い。とりわけ短期における投入・産出調整において、これが現れる。いったん不足資材が生ずると、このボトルネックが伸縮的な調整を許さない。長期における適応も、きわめて遅い。余剰資材を必要な企業に融通すればよいものを、抗しがたい投資飢餓症は必要な投資資材の放出を拒否するのである。強力な利潤の再分配、投資プロジェクト決定に要する官僚的手続き、投資市場の欠如が、投資資源の素早い調整を妨げてしまうのである。

こうした調整はまた、生産者の動機にもとづいている。一方において、彼らは消費者の不満に無関心でいるわけにはいかない。しかし他方において、不足を維持しておくことにも関心を示す。なんとすれば、不足が存在する限り、品質、輸送時間、コストをさほど気にとめずに生産できるからである。

不足をひき起こす諸要因のウェイトのおき方について議論はあるが、それらすべてが慢性的不足を説明する重要な役割を担っている点については、意見が一致している。

不足の維持と除去

ハンガリーは次第に古典的な不足経済から離脱しつつある。多くの論者も指摘するように、他の社会主義国に比べて、食料品や工業製品の供給はかなり良好な状態にある。こうした改善のサインを観察できるとはいえ、現状はきわめて複雑かつ多岐にわたっているため、慎重な観察・検討を要する。

非営利国家機関によって供給されるサービスは、無料ないしは名目的価格で提供されている。この最も重要な事例が医療であり、依然としてここには飽くなき需要が存在している。私的な診療所もあるが、この領域における不足は医師にたいする「謝礼」を不可欠にしている。

国家独占のもとで、有効価格で提供されているサービスもある。この最も重要な事例が電話サービスである。電話回線の不足はきわめて深刻

であり、現状のまま続くとしたら、電話設置の待ち時間は一五年になる。回線の混雑度もひどく、一度に繋がらないこともめずらしくはない。

国家セクターと私的セクターの双方で供給されている財・サービスもある。住宅がそれで、都市郊外の集合住宅は公的に所有され、かつ維持費さえもカバーしえない価格で賃貸されている。公営住宅の応募にはさまざまな制限があるにもかかわらず、ここでの待ち時間もまた数年に及ぶ。他方、私的な住宅の賃貸料あるいは住宅建設の価格はきわめて高い。住宅市場は機能し始めてはいるが、多くの摩擦をひき起こしている。乗用車市場もこれと似た状態にあり、供給を独占している国営企業は、一定の待機時間(二―三年)に合

わせて供給を維持している。他方、中古車には私的な市場が存在し、ここでは需給で価格が決まっている。総括的にいえば、ハンガリーは以前の不足経済から抜け出しつつあるといえるが、この変化は国営セクターの改革によるというよりは、種々のセクター間のウェイトの変化に起因するものである。公式・非公

式の私的セクターが、国家セクターの埋め合わせの役を担っている。しかし、それでも不足は除去されていないのである。

インフレーション

近年におけるインフレはやや加速されつつある。この原因を改革に求める見解が一般的になっているが、これはあまりに事態を単純化しすぎている。もちろん、改革は価格・賃金の管理を緩めることになったが、これだけでインフレの加速を説明することはできない。

ここ数年のあいだ、政府のマクロ経済政策は、緊縮プログラムの一環として、インフレ措置を慎重に利用してきた。対外累積債務の深刻化と交易率の悪化に対応するために、政府は国内消費の増加を止めたり切り下げたりせざるをえなくなった。これに従って、消費財・サービスの名目価格が度々改定されることになり、これが私的セクターの価格にも及んでいるのである。いわば制度における変化に起因するものではなく、政策における変化が主たる因子になっているのである。

この面における政府の対応は、やや矛盾している。価格引き上げ決定がインフレ過程をもたらしているにもかかわらず、不当な価格引き上げや利得を求めているとして、企業や私的セクターの経営者を攻撃するのである。経済学者についていえば、この種の相反した態度をとるものは少なく、インフレの進行がそれほど急速でなければ、インフレは改革を促進すると考えている。それが相対価格・賃金の歪みを是正するからである。また、部分的な価格引き上げの連続的な実行は、まずい政策であると考えている。なぜなら、引き上げの度にその波及効果が生産コストと生活費用に及び、価格―費用―賃金―価格のスパイラルが生じるからである。そしてこれは金融的な規律を弛緩させ、合理的な計算を損なうことになる。

不足、インフレ、改革の関連についていまひとつ指摘しておこう。不足、インフレの加速、対外債務の累積は、経済管理の再集権化への口実になりやすい。市場の機能を抑制し、種々の介入・管理や、中間財の配給制度を復活させようとする誘惑が働く。不足経済の諸問題をひき起

こした大本の制度的な因子を、再び温存してしまうのである。一時的な措置とされる場合でも、再集権化の方策は何ら問題を解決するものではない。

対外不均衡

対外不均衡は必ずしも社会主義制度に固有のものではない。この原因をめぐって、ハンガリーの内外で議論がおこなわれている。つまり、対外的条件の変化によるものか、それとも条件の変化にたいする緩慢で非効率な適応によるものか、という主要原因をめぐるのである。双方が作用していることに間違いはないが、筆者自身については、後者の要因により大きなウェイトがあると考えている。

資本主義国がスタグフレーションに陥ったオイルショック以後も、ハンガリーは強制成長の道を歩み続けていた。不断の成長を求めたマクロ政策と真の分権の欠如が、対外債務の累積を結果したのである。これは改革と矛盾する方向である。ただこの面にかんして、「政策」要因と「制度」要因を区別するのは難しい

が、不完全で表面的な制度の改変が従来の行動様式を温存しているといえる。

長いタイムラグの末にマクロ政策は変更されたが、これも政府の緊縮政策による突然の成長停止という形でおこなわれた。つまり、分権化された経済主体の市場への対応がこの変更をもたらしたのではなく、対外債務を削減するための輸入制限とダンピング輸出の強制による行政的な介入という、再集権化の結果なのである。それによって確かにハンガリーの貿易収支は改善したが、対外不均衡のより深い元凶は、依然として残存したままなのである。

個人選択と分配

制度的な変化や、緊張やアンバランスの残存ないし出現が、個人の生活にどのような影響を与えているだろうか。経済的選択の自由度について考えてみたい。

古典的な指令経済は、消費者主権からほど遠い状態にあった。消費の大部分は非市場的経路を通して、給付のごとくに分配された。慢性的な不足は強制代替を頻発させ、経済的

な自由を損なうことになった。不足によって強制貯蓄も生じだし、個人の就業選択も限定されたものであった。

ハンガリー改革は選択の幅を大きく拡大することになった。財・サービスの官僚的配給の領域は、なくなつたといえないまでも、かなり狭められてきた。価格を通して消費者のシグナルを生産者に伝達し、それに対して生産者が反応するような財・サービスもでてきた。とはいえ、これは一定の領域に限定されており、その他のところでは、合法的な保護、消費者選択にたいする恣意的かつ温情主義的・官僚的介入などの合成効果によって、供給構成が制御されているのである。

貯蓄や投資の選択機会も広がった。住宅の官僚的配分を待つことなく、私有の住宅に投資できるようになった。金融資産の保有にも、新しい選択が可能になった。労働の移動にたいする行政的管理が撤廃され、就業の自由が獲得された。なによりも、企業家的能力・精神をもつものにたいして、私的セクターでそれを活用する道が開けた。もちろん、いまだ種々の摩擦や行政的制限によつ

て、その選択の範囲は限られている。

個人的選択の問題は所得分配と密接に結びついている。今のところ、第一経済の所得格差が縮まり、第二経済の所得格差が広がっているが、全体としての分配の不平等が広がったかどうか確定的なことはいえない。

社会主義のビジョンと現実

以下の最初の二節では過去のビジョンを、次の二節ではハンガリーのそれを扱う。ランゲのモデルのように、あるビジョンは純粋な理論形態をとっているが、他のものは規範的理論と政策提案との混合である。

ランゲの市場社会主義

最初の問題はこうである。「はたして改革されたハンガリーのシステムは、ランゲ型経済ないしはそれへの接近と考えることができるだろうか」。ここまでの叙述で、読者は明確に否定的な回答を与えることができる。

オスカー・ランゲ自身は、社会主

義が公的セクターと私的セクターの二重経済である可能性を考慮していたが、論争の的になった提案では公的所有にあるセクターについて定式化している。そこで、ランゲ・モデルをハンガリーの国家所有セクターと対照することしよう。

ランゲ型経済はワルラス的情報構造をもっている。価格体系や需要観察によつて、十分な情報が提供され、試行錯誤の方法でワルラス的均衡価格を生成し、これに経済主体が反応する。これにたいして、ハンガリーの価格当局すら、市場一掃(cleaning) 価格を設定する意図を何らもっていない。財・サービスの価格は相対的な希少性を反映しておら

ず、市場を一掃しえない国有セクターの価格は価格体系を歪曲さえしている。またそもそも、国営企業の価格反応性それ自体がきわめて弱いことが、主要な問題なのである。

ランゲ型経済では、企業は利潤極大化をめざすが、ソフトな予算制約下にあるハンガリー企業の利潤インセンティブは弱い。また、ランゲ型の計画者は自己の活動を価格決定に限定しているが、ハンガリーの官僚組織は経済生活のすべての側面に介入している。

このように、ハンガリー経済がランゲ型でないとしても、次の問題は別のものとして答えることができない。「はたして、ランゲ型経済は実現可能であろうか。また、それは望ましいものであろうか」。前者の問いが主要なものである。それが否定されれば、後者の問いは意味をなさないからである。

ランゲのモデルは誤った諸仮説にもとづいている。まず、計画者については、計画機関にいる人々があたかもプラトン哲学の再来者のごとく、公平無私、全知全能で、価格を超過需要に調整させるルールを厳格に実行させるだけで満足できる主体

と考えている。そのような下界を離れた官僚制など存在してこなかったし、今後も存在しえないだろう。

ランゲのモデルはまた、企業行動にかんする誤った仮説にもとづいている。彼は、企業がシステム設計者が描いたルールに従うものと考えている。しかし社会は、ゲームの制作者が自由にルールを考案できる、室内ゲームとは違うのである。企業行動の複雑性にかんしては、社会学や経済学、あるいは官僚制の社会心理学などがあきらかにしている通りである。一九三〇年代のランゲは確信的な社会主義者ではあったが、ワラス純粹理論の不毛な世界に生きており、彼の基本的な諸仮説の社会政治的な基礎について考察しえなかったのである。

ランゲは、官僚的方法で市場をシミュレートできるだろうと考えていた。しかしこの着想のロジックのなかに、矛盾が存在する。数百万の価格を連続的に調整・再調整するためには、大量の官僚が必要になる。もちろん、現代のランゲの継承者はこういうだろう。

「コンピュータを使って、大きな集計物についての価格指標を与え、経

済主体がこの集計物を分計していく際の、計算原理を指示するルールを与えればよい」と。この種のことは、多少ともハンガリーでおこなわれている。企業はこれらの原理が利益に合わないと考えれば、それを切り抜けることができる。これに対抗して、当局はより詳細な指示、制限、禁止事項を設定する。この過程から生じてくるものはけっして成功裏にシミュレートされた市場などではなく、規制者と官僚制によって規制されている企業とのあいだの、絶えざるコンフリクトなのである。

社会主義にかんする新古典派の議論は、正しい価格シグナルを計算する問題に一面化されていた。そこに欠落していたものは、「競争者」にかんするミゼス・ハイエク・シンペーターの着想である。純粹市場過程を考えれば、自らの知恵と機会を利用しようと考え、かつそれを実行できるものだけが、そこに参加する。彼らは競争者であり、その意味で市場は常に動的な不均衡状態にある。すべての競争者の潜在能力は、ふつう実際の需要を超える。ある者が勝ち、またある者が負ける。勝利者には報酬が、敗者には罰則が待つ

ている。本稿の用語を使えば、ミゼス・ハイエク・シンペーターの市場は、ハードな予算制約と買い手市場を包括しているのである。

システムや政策がこれらの条件の創出を保証しなければ、純粹市場など存在しない。ランゲとその継承者たちの最も大きな誤りは、これらの条件を考慮しなかったことにある。

ナイーブな改革者

この名称は、筆者が経済改革のバイオニアたる経済学者に付したものである。五五・五六年前後の筆者もこのグループに入るだろう。また、六〇年代前半におけるポーランドのブルス、ソ連のリーベルマン、チェコのシクなども、このなかに入る。

これらの人々は同じ見解を有しているわけではなく、その意味で異質なグループを形成しているが、彼らに共通した特徴を指摘したい。これらの特徴こそ、六八年改革の公式決定や文書に明瞭に反映されているものだから、なおさら重要なのである。多くのハンガリーの経済学者は長くて苦い経験を通過したことによって、当初の純粹さを失ってしまっ

た。そうした「擦れた」ハンガリー人の態度が、今もなお純真さを失わないで改革のために苦しんでいる友人を、いらだたせることもある。

ナイーブな改革者たちは、間接的な官僚的規制と市場とのあいだのコンフリクトを認識していない。指令システムを止め、直接規制から間接規制に転換することだけで、活性的な市場を創出する条件が生まれると考えた。もし利潤極大化を求める自立的企業が、相対価格、利子率、租税などのシグナルにたいして、適切な需給変化で対応できれば、中央の規制と市場とのあいだには何の矛盾もないと考えたのである。ハンガリーの経験が示しているように、この基本的な仮説は誤りである。

この基底にある哲学は、完全な調和が達成できる、あるいは少なくともそれに接近できるという楽観的な確信である。官僚的調整と市場的調整の共存は、「最良の二つの世界」を獲得することを保証しない。「最悪の二つの世界」でもありうる。相互に補完しあう場合もあるが、官僚的介入が強ければ、種々の介入の糸に絡まった企業は市場シグナルに反応しなくなるだろう。まさにこれ

が「制御の幻想」なのである。

ナイーブな改革者たちは、官僚機構の役割と市場の役割に、合理的な境界線を引こうとした。多くの論者は、「単純再生産」を市場によって、「拡大再生産」を計画者によって規制させるような境界線が引けると考えたのである。一方において官僚機構は投資の規制だけに自らの役割を限定することができず、他方において成長や技術革新が収益性から切り離されたところでは、企業の自立や利潤動機は幻想にすぎなくなる。それが明らかになってきた。

ナイーブな改革者たちについていまひとつ付言すれば、彼らは国家所有セクターの問題にもっぱら関心を示し、非国家セクターの役割についてそれほど重視しなかった。しかし今日までの経験は、まさにこの非国家セクターによって、肌を感じうるほどの重要な変化がもたらされたことを、明らかにしているのである。

ガルブレイス派社会主義

現在のハンガリーの経済学界を特徴づけるのは、簡単ではない。ある意味で、すべての経済学者と政府官

僚は、改革の支持者である。しかし改革の一般的構想についてではなく、現在のシステムの具体的評価や提案をめぐるビジョンについては、一様ではない。そこで、このビジョンを二つの「学派」に区分してみようと思う。この区別にはやや恣意的なところがあることを断っておかなければならないが、現在の幾分か漠然とした二つの思想的潮流の、いわばプロトタイプを描いてみようというわけである。

その一つが、「ガルブレイス派社会主義」である(筆者の命名による)。例えば、ホルバート、コズマ、シュガール、セグーの著作では、しばしばガルブレイスが引用される。これとかなり激しく論争しあっている、いま一つの学派が「ラディカル改革派」である。

ガルブレイス派は、ラディカル派が時代錯誤的なシステムを熱望しているとは非難している。現代資本主義すら大きな変貌を遂げているのに、ラディカルズは一九世紀のマンチェスター資本主義を呼び込むようなシステムを社会主義に導入しようとする、と批判している。社会主義のフリードマン主義者だというわけであ

る。そこで依拠するのが、現代資本主義を二重経済として叙述する著者や、ガルブレイスなのである。

すなわち、現代資本主義の第一のセクターでは、強力な官僚的介入によって創造された環境下で、巨大独占・寡占企業が政府の庇護のもとで営業している。他方、第二のセクターでは、小生産者や商業者あるいは家計が、市場的調整のもとで活動している。これが現代資本主義の実相だとすれば、社会主義にこれ以上の分権化を必要とする理由がどこにあるのか。かえって、社会主義でこそ、巨大企業と中央計画との調和がとりやすいのではないかと、問うのである。

ガルブレイス派は改革以前の指令システムの復権を目指していると非難されることもあるが、実際には現状の正当化にその意図がある。これ以上のラディカルな改革を排除し、改善のための緩やかな変化を提案している。そこで引用されるのが、カレツキーやケインズのマクロ経済学であり、西側の巨大企業・銀行・省庁の調査旅行からの教訓なのである。現代資本主義との距離がそう大きくないことを、ハンガリーの実践の「イデオロギー的」な根拠にする

のは辻褄があわないが、問題はこの同一性が誇張されている点にある。

実際、二つのシステムにおける農業、工業、商業部門の国家セクターと非国家セクターの比率は、まったく異なっている。また、双方のシステムに「ソフトな予算制約」症候群や官僚的介入が共通にみられるとはいえ、その頻度や強度はまったく比べものにならない。資本主義システムでは、それらが市場的活性を消滅させてしまう限界を、けつして超えることはないのである。

議論の弁証法的な展開過程を考慮すれば、ガルブレイス派の見解はラディカル派の弱点を突いているがゆえに、注目に値するといえよう。

ラディカル改革派

これは何か共通の改革プログラムを共有している集団ではなく、改革についての類似した見解を有している経済学者を指している。ニエルシュ、タルドシュ、パウエル、アンタルなどの著作が代表的なもので、そこには共通した精神がうかがえる。

彼らは現状についての慎重な批判的分析から、ナイーブな改革者とは

一味違った市場社会主義の青写真を考案している。それを列挙してみると、次のようになる。

市場、掃、価格の体系が必要であり、価格決定は市場に任せなければならない。価格に十分に反応しうるように、利潤インセンティブを強めなければならない。これに加えて、企業が純資産の増加に努めるような、新しいインセンティブ手段を導入する必要がある。

これを最大公約数として、「改革パッケージ」に含まれる提言をさらにあげてみると、企業規模分布の修正（中小規模の企業の創設および規模の経済性・国際競争力のない巨大企業の制限）、市場の参入障壁の除去（異種業種・セクター間などの多様な競争の促進）、厳格な金融規律の貫徹（商業銀行の創設、伸縮的な資本市場の創設、破産の容認、企業の自己金融による成長の容認、經常所得の国家集中率の削減）、私的経済活動の制限の撤廃と私的営業の保護にたいする法的措置、全体的な経済変化に必要な政治的条件の創出（種々の社会経済グループが適正な政治的代表を獲得すること）等々である。筆者は以上の提案の実行が望ましいと確信しているが、若干の重要な

問題が残されていると考える。

その一つは、改革された社会主義システムの青写真における非国家所有、とりわけ私的所有の将来像についてであり、いま一つは伝統的な国家所有形態が、以上に列挙された改革による変化と両立・共存できるかの問題である。この後者の問題については、企業管理を政府から切り離す案、労働者管理の提案、「所有の利益」を代表する機関と経営を分離する案など、さまざまである。

ハンガリーの政治構造のもとで、公企業が真の自主性を獲得できるだろうか。官僚機構が自らの自発的な抑制によって、以上の提案によって定められた境界を順守するだろうか。つまるところ、社会主義の改革過程は、ハンガリーで達成されたものを超えることができるだろうか。筆者自身はこれらの問いにたいして、相反した気持ちを告白せざるをえない。ハンガリーの一市民としては、これら一連の問いに肯定的な回答を望んでいる。また、改革の助言者としては、以上に列挙した方向に進めるようにしたい。そして一研究者としては、疑念をもつ権利を留保しておきたい。



屋外環境を演出するニット



遊器具 健康器具 街具

主要営業品目／遊器具（ブランコ、スベリ台）
健康器具（懸垂器具、ジャンプ器具）
街具（ベンチ、パーゴラ、車止、柵）



日都産業株式会社

本社／東京都杉並区西荻南1丁目1番9号
TEL03(334)2216(代)
関西／大阪市淀川区西中島4丁目12番22号
営業所 第五倉田ビル 〒532 TEL06(305)6921
代理店／札幌・仙台・秋田・前橋・静岡
名古屋・豊橋・上野・広島・宮崎

二・二六事件への 道と日蓮主義者

連載小説

海ノ上ニ城現ハル

一城ツツ現レテハ消エル

後 虹現ハル

北 一輝

けじょう

昭和史の

第4回

寺内大吉

絵●河原まり子

靈感夢告

一

「海ノ上ニ城現ハル」という短文を題名に添えてある。北一輝自身が「神仏言集」と呼んだ日常の靈感夢告から引用した断片である。

北一輝は昭和四年の四月ごろから朝晩欠かさずに法華経を誦読していたようである。これには妻のすず子も同席した。

法華経は序品をふくんで二十八品(章節)から成る大部の經典である。これを読みこなすのは容易ではない。全文を丸暗記し、息もつかずに「読瀉」してゆかねばならない。

読瀉とはちよつと汚ない言葉だが、經典を読瀉できるほどにならなければ一人前の法師、敬虔な信者とは言えない。一気呵成、舌も千切れよとばかり読みくだすのである。

読瀉は読経する者を陶醉幽玄の境へ誘いこむ。さまざまな幻影をみる。法華経のような大部にわたる經典では、こうした夢遊状態へ落ちこまないほうが不自然かもしれない。

北一輝も法華経を「読瀉」しながら靈感や夢告をつねに体感したらしい。毎日それを克明に書きつらねたのが「神仏言集」である。実弟で衆議院議員だった北吟吉は「靈感的予言書」と呼び、研究者の松本健一は「靈告日記」と名づけている。

昭和四年四月二十七日から始まり、最後は昭和十一年二月二十八日(一九二九/三六)で終る。つまりその最終日は青年将校が武装蜂起した二・二六事件の終熄時で、北自身も「(昭和十一年)二月二十八日、午後一時、祈願、大海ノ波打ツ如シ」と書きつらねた二時間後、憲兵隊によって逮捕されている。代々木の陸軍刑務所へ引かれたまま一年半後、銃殺刑に処せられるまで、一度も帰宅していない。つまり我が家で法華経を読瀉する機会は遂にやってこなかったのである。

ところで「海ノ上ニ城現ハル、一城ツツ(ツツ)現レテハ消エル



後 虹現ハル」の霊告だが、これが書かれた日付は昭和六年の九月十八日の「朝」なのである。

海の上に城現わる、とは一見して幻想風景を想わせるが、北一輝の精神土壌を考えれば「海の彼方、中国大陸の新しい城」と解するのが自然だろう。その新しい城が現れては消え、消えては現れて、あとに「虹」が美しくひろがったというのだ。王道楽土の新しい天地「満洲国」そのものではないか。

ここで私たちは驚きの眼をみはらねばならない。

九月十八日は九・一八事件、ずばりその日である。柳条湖で関東軍が仕掛けた爆弾が炸裂するのは夜陰十時半ごろである。気鋭の若手参謀片倉衷さえ知らなかったこの謀略を、万里をへだてた東京在住の北一輝がすでに知りつくしていたのであろうか。電話電信、TVラジオも通じない時代だった。

まさに驚きである。

話は先走るが、北一輝の「神仏言集」で最も強い影響を受けたのは、当時の行動右翼、とりわけ青年将校たちではなかったろうか。二・二六事件の蹶起前後、北一輝の霊告は何らかの経路をたどって青年将校たちへもたらされ、彼らを勇気づけた。軍法会議でこの「神仏言集」をいち早く入手した検察法務官側が、北を「蔭の首魁」ときめつけて断罪へ追いやる論拠ともなったのではあるまいか。

前号までのあらすじ

昭和六年九月十八日起った満洲事変から満洲国建国―上海事変へ―と昭和史の暗黒のドラマは急進展する。その背後に日蓮イズムが動いているのを察知した上海特派員の改作は東京に出張、かつての上司、諏訪純三と再会、諏訪から衝撃的な事実を知らされる。井上準之助が暗殺された事件によって、日蓮宗一派の僧侶、井上日召のひきいる「一人一殺」の暗殺集団「血盟団」の存在が明るみに出たというのだ。

ここで蹶起前後の霊告文を紹介しておく。

〈昭和十一年〉二月二十一日、朝、経、

山岡鉄太郎物申す

稜威尊し

兵馬大権、干犯如何

答 大義名分自づと明かなるハ疑い無し、他末節に過ぎず。

二月二十一日の時点で北一輝はすでにこんどの叛乱に兵士を使用することを承知している。兵馬の大権を干犯したことになるのかどうか。青年将校たちの悩みに明快な決断を与えている。

ここへ出てくる山岡鉄太郎。じつは柳条湖爆破の日の霊告にも「虹現ハル」に続いて「其処動くな、鉄舟」とあるのだ。これへの解釈はあとで述べることにする。

二・二六事件時の夢告を続ける。

二月二十四日、朝、経、

大内山光射ス。

暗雲無シ 善道

二月二十五日、午

余一人、明治神宮参拝。

二月二十七日、朝、祈、

二・二六。夜半一時半、寢室ニ入り眠ラントスル前ニ革命正義軍ノ文字並ビ現ハレ、革命軍ノ上ニ二本棒ヲ引キ消シ、正義軍ト示サル。

人無シ勇将真崎在リ

国家正義ノ為メ号令シ

正義軍速ニ一任セヨ

この日の夢告はいち早く青年将校へ伝えられ、革命正義軍をわざわざ「正義軍」と訂正されたことに彼らはいたく感動している。さらには「人無シ勇将真崎在リ」は殺戮者たちに維新政府樹立の夢をみさせたことであろう。

二月二十八日

二・二八 朝、神仏壇ニ向テ祈ル。只難有サニ嗚咽涕泣。誦経止ム度々、次ギ〱ニ示サルル左ノ如シ

(第二) 神仏集ヒ賞讃賞讃

(第二) おおい嬉しさの余り涙 込み上げか 大山

(第三) 義軍勝て兜の緒を締めよ 仙人

(第四) 義軍先発、八幡大菩薩、飯綱大権現道、光(てら)ス

この日の朝まで北一輝の夢告文はすっかり調子づいている。躍動感までがにじむ、だが、逮捕(二月二十八日午後)の直前、不安の影がよぎるのを敏感に察知したか「祈願、大海ノ波打ツ如シ」と何かすべてを投げ出してしまった感じである。

二

昭和六年の九月十八日、その朝すでに東京の北一輝は奉天で発生する事件を「透視」できた。歴史の一大転機を、その神秘的靈感でとらえてしまった、ということになっている。北一輝の霊異性が青年将校たちの間で喧伝されたにちがいない。

その喧伝者は、北一輝に密着し、その著『日本改造法案』の出版権も掌握していたスポーツスマン西田税であらう。

北の夢告だが、一説にはその妻すず子が法華経の読経中に口走ったものを北が文章にまとめた、とも言われる。

北すず子は長崎の出身で、一輝が辛亥革命(一九一一年十月)の突

発で上海の同志宋教仁に呼び出され、ガーデン・ブリッジに近い松崎洋行という旅館に泊まっていると知り合った。すず子はそこでお手伝いをしていた。

お手伝いと言ってもメイドや洗濯女の類ではなく、松崎洋行をアジトとした革命派の幹部たち、宋教仁、黄興、居正、譚人鳳をはじめ蔣介石とも親しかったというからマダム格だったらしい。一輝二十八歳、すず子（当時は間瀬ヤス）二十七歳。出会うと幾ばくもなく兩人は結ばれたという。

すず子は単身上海へ乗りこんできて、マダムに代ってだいいな客をもてなすほどだから才気煥発、度胸も満点だったようだ。長崎にいたころは丸山遊廓で働いたという説もあるが、定かではない。

北一輝は佐渡の素封家で、すず子と結婚したところ、すでに家どうしで取りきめた婚約者がいたようだ。だが一輝はそんな話に耳を貸そうとしなかった。北家ではその婚約者を実弟の吟吉（早大教授から衆議院議員）に振り替えたという説もある。

よほど気の合った夫婦らしく生前二十数年間を仲睦まじく、北の処刑後も私室に夫の遺影を中心に青年将校たちの写真を整然と飾って香華を絶たなかった。

夫婦の強い結びつきに法華信仰を無視することはできない。この経典を軸に組み上げた宗教情念の世界で同志同朋の密度を濃くしていったのであろう。

西田税未亡人が松本健一に語った話として、北一輝が獄へ去ったあと、すず子夫人には全く「神さまが降りて来なかった」そうだから、夫婦一体。この夫婦なればこそ靈感夢告のマントラ（真言）がどちらからともなく発せられても不思議はない。

ただし、そのすべてを心靈振動による秘儀——純粹マントラと呼ぶには疑問がある。とりわけこの日、九月十八日の霊告には「造作」の痕跡が充分に考えられる。

その造作とは……北一輝がすでにこの日、奉天で関東軍が作戦行

動を起すことを承知していたという意味だ。
井上日召は「一人一殺」で書く。

——七月頃のことだったと記憶するが、ある日、西田税がやってきた。その話によると……

橋本欣五郎大佐が中心になって、満洲の事挙げに呼応して内地でもクーデターを起すから、賛成援助を頼むと北一輝の所へ話があった。北は橋本に向って「私はこの頃、法華三昧に暮しているから、そういうことには出たくない。若い者に相談してくれ」と西田を紹介したので、橋本は西田に話を持っていった。西田はこれを聞いて北に話すと、北は日召に相談せよ、と言った。そこで西田が私を訪れてきた、というわけである。

北一輝と私とは以前から知り合っていた。私は彼の才腕を高く評価していた。彼を駐ソ大使にしたら、スターリンと取り組んで面白い外交をやるだろう、とそんな風な想像をしたこともある。

つまり満洲と同時に躍起する東京のクーデター。いわゆる十月革命の内容を北一輝はその首謀者橋本欣五郎大佐から聞き知っていたのである。しかも代理人に推した西田税はこの十月革命をぶち壊した張本人と言われ、五・一五事件では襲撃されている。

北一輝の夢告、九月十八日にある「其処動くな、鉄舟」はまさしく十月革命を言いあてているのではあるまいか。九月十八日、奉天と同時に内地の軍民有志が宮城を占拠し、一気に軍人内閣を作るというクーデター。北は西田ともどもそれをおさえつけているだけに、この夢告には現実味が色濃い。

もともと北一輝は単純なファシストではなかった。政財界の深部へも太いパイプを挿入し、そこから活動資金を汲み上げているのだった。この時機尚早論にしても金銭や利権がからんでいたのかもしれない。

鉄舟。江戸の幕臣山岡鉄太郎。これは江戸——東京を指す隠語にすぎなかったのではなからうか。前にふれた二・二六事件時の「山岡鉄太郎物申す。稜威尊し……」も東京での革命兵乱、ぐらいいに解して良いのではなからうか。

ところで柳条湖爆破の秘密だが、かなり以前から中央要路には知れわたっていたようである。「原田日記」で有名な原田熊雄は昭和六年の六月二十三日、謀略のかなり詳細な内容をキャッチして、木戸を通じて牧野伸顕内大臣へ伝えている。近衛文麿や西園寺公望の耳へはいつていたはずである。

その内容とは、五月三日の朝、石原莞爾が旅順の板垣征四郎宅を訪れ、密談したもので「関東軍司令官は満鉄保護の爲なら独断で兵力を使用できる」という特例を利用し、中国軍に満鉄を攻撃したと見せかける謀略だった。同席したのは張学良の軍事顧問今田新太郎大尉と参謀の花谷正少佐だった。

花谷はこのあと、石原の密命を帯びて上京する。その密命とは「奉天謀略に主力を尽すこと……奉天附近で日支両軍衝突の場合における必要事項」を陸軍省軍事課長へ強く申し入れることだった。時の軍事課長は永田鉄山大佐で、彼はすでに前年の暮れ満洲を視察した折、石原と細部にわたって合意を遂げていたようである。

軍事行動を奉天に集中する場合、張学良軍の本拠北大營を爆砕する巨砲を必要とした。永田鉄山の努力で二十四センチ榴弾砲二門が極秘裡に神戸から積み出され、奉天の独立守備隊兵営内へ運びこまれた。この巨砲が柳条湖爆破の暁方、すぐまんにそびえる北大營目がけて火をふいた。

三

かなり適確な情報が大内大臣を通じて宮廷へ流れていたが、現地軍のハネあがりを憂慮するばかりで、それを抑止しようとする力はい

っこうに動こうとはしなかった。しかも侵略が成功するいわゆる「結果オーライ」で嘉状までが出るといふ有様だ。この指導性を失った日本の権力者の曖昧な態度は日中十五年戦争をとおして一度も改められなかったのである。

事件一ヵ月前の八月二十日、板垣征四郎大佐が上京してくる。井上日召の「一人一殺」は「満洲で九月十八日に挙行するから、内地も同月同日に断行することにした」と書く。おそらく板垣の上京で橋本欣五郎や西田税がこれと密議し、スケジュールの細密をきめたことと思われる。

五月当初、石原から計画を打ち明けられたとき積極的ではなかった板垣もいよいよここへきてハラは固めたようである。

九月十八日としたのは、新しく関東軍司令官となった本庄繁が麾下各部隊の巡閲をひととおり終えてから、という理由からだった。当初九月二十八日予定だったのを、中央からの鎮撫使建川少将（参謀本部第一部長）が奉天へやってくるという電報に接し、急ぎ変更したと言われるが、ややうがちすぎた説ではなからうか。その「止め男」の建川がすぐに主戦派へ変身している。東京の橋本を中心としたクーデターは九月十八日に焦点を合わせていたのである。

それを裏付けて、北一輝の夢告は柳条湖爆破以後、日ごとに激越の度を加えてゆく。あたかも現地の奉天にいるかのようにである。

九月二十一日 朝、経。

進、進、進。

九月二十二日、朝、経。

此機往年の恥辱一掃せよ

戦先き 大山

對外策後 種臣

九月二十三日、朝、経、

おい 大山

大日本帝国を亡ぼす政治家共の手に乗るな 乃木
戦のみ勝て 種臣

九月二十四日、朝、経、

広キ土地ニ巨大ナル杓(くじ) 三本打ち込ミ居ル有様

九月二十五日、朝、経、

屈辱外交此機に及び一掃せられたし 種臣

夢告が毎朝のニュース解説の見出しもどきになりつつある。わずかに明治の元勳大山巖や乃木希典、副島種臣の口をかりて夢告めかしている。

それにしても日露戦争の終結以後、日本民族の満洲の地へ向けた怨念執着は異常とも言える。父祖が流した血を、何としてでもあがなわずにはおれなかったであろう。当時の日本人が、大連、旅順から奉天へ至る満鉄路線の、どの一駅を耳にしても血が騒いだと言うのは誇張ではあるまい。故郷の地名以上の愛着をおぼえたようである。十五年戦争侵略の根底に、日本人のこの異常な「満洲執着」の感情も見落してはならない。

——私は八月初めごろから謀略のにおいを嗅ぎつけ、その圈外すれすれの処にいた……九月十八日の深夜、旅順で事件発生を知った時、とっさにヤッターと思った。板垣、石原両参謀が、われわれ若手参謀を度外視して決行したことが無念だった。

これは同じ関東軍参謀だった片倉衷少佐の述懐である。事件発生時、彼が全くツンボ状態に置かれていたことを明らかにしている。こうして爆破計画はすぐ膝元の若手参謀にさえ秘匿されて潜行した、と後には伝説化された。果たしてそうか。東京の重臣連中や右翼浪人へ筒抜けだったのである。いわんや軍務局が音頭を取って奉天集中攻撃の巨砲すら発送しているではないか。

この点に関して同じ片倉衷は証言する。

——この二十四^{ガッ}榴弾砲が永田大佐(鉄山)の努力で送付されたということは、石原中佐(莞爾)も極秘にしており、ずっと後になって判明したのですが、しかし私共は中央から送られて来たのですから大体は永田の線と了解しておりました。事態が速かに進行し、東京と関東軍はうまくゆかないことも多く、また、東京においても陸軍大臣(南次郎)は内閣の中で苦心を重ねたようです。永田大佐はその間に処して軍事課長という職務上、いろいろな政策的調整の役に当たったと思われます。関東軍としても重藤大佐(千秋)、橋本欣五郎中佐、あるいは根本中佐(支那班長)等の人々に対して、何とか満洲問題を解決するため情勢を有利に計ってくれ、という連絡のやりとりぐらいはあった……

奉天の街なかへ市街戦にはおよそ似つかわしくない巨砲が持ちこまれてもなおその意図が見抜けず、また「情勢を有利にするための連絡ぐらいはあった」としか十月革命の同時蜂起を嗅ぎ出せなかった片倉は道化師ということになる。もちろん戦後に書かれた手記で、柳条湖事件と無関係だったことを強調しなかったであろうが。

それ以上に片倉は陸軍部内で極端な慎重派今村均たちに属していたので(親戚関係にもあった)板垣や石原が彼だけには秘匿した事実もあり得たであろう。

法華経を機関銃のような早や口で読誦しながら靈感夢告を書きつけて、政治的にこれを活用しようとする北一輝。建国会議場に「南無妙法蓮華経」の字幕を麗々しくかがげ、国際道義をうたいあげたつもりで石原莞爾——いずれも法華信者にはちがいないが、かなり異質だったことは、井上日召のそれともあわせて考察してゆかねばならないであろう。

(つづく)